会　　議　　録

会　　議　　名	令和３年度第３回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事　　務　　局	市民部　コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開　催　日　時	令和３年１１月４日（火）１８時３０分～１９時５０分		
開　催　場　所	市立はけの森美術館　多目的講義室		
出　席　委　員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 原田隆司委員 加藤治紀委員 河田京子委員		
欠　席　委　員	坂井文枝委員		
事　務　局　員	コミュニティ文化課文化推進係　　吉川、岡本 同　　はけの森美術館学芸員　中村、河上、西尾		
傍　聴　の　可　否	可		
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由		傍聴者数	０人
会　議　次　第	１　事業実施報告等 ２　意見交換等 ３　その他		
会　議　結　果	別紙のとおり		
会　議　要　旨	別紙のとおり		
提　出　資　料	開催した展覧会・ワークショップ等及び今後の予定		

令和３年度　第３回小金井市立はけの森美術館運営協議会

令和３年１１月４日（木）

【鉄矢会長】　　令和３年度第３回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開催させていただきます。

まず初めに、配付資料の確認についてですが、次第がありまして、資料１が２枚、資料２、横長のものが１枚、招待券と「二人のスケッチ」のチラシという感じでよろしいですか。皆さん、お手元にありますでしょうか。

それでは、次第に沿って進めたいと思います。１番、展覧会「二人のスケッチ」、観覧、これはもうよろしいですか。

では、事業実施報告等、２番に入りたいと思います。では、２番のほうをよろしくお願いします。

【事務局】　　中村さん、お疲れさまです。聞こえますか。

【中村学芸員】　　はい、聞こえます。では、配付した資料に基づきまして、ZOOMにより報告をさせていただきます。資料が資料１と資料２とございますが、資料１の冒頭のところから報告させていただきます。

１番目の開催中の展覧会に関しまして、既に御覧いただいたとおりですけれども、企画展としまして、「二人のスケッチ―藤島武二と中村研一―」という展示を１０月３０日から開始いたしました。２０１９年秋期以降、企画展に関しましては新型コロナウイルス感染症対策のために開催を見合わせておりましたので、２年ぶりとなります。

開館時間に関しましては、午前１１時から午後４時まで、入館は午後３時半までということで、部分的な縮小を感染防止対策として継続しております。休館日に関しましても、月曜日、火曜日を休館としまして、こちらも感染防止対策としまして開館日を減少するという形を継続しております。

なおミュージアムグッズの販売に関しましても、セット販売によって販売数を減少するという形で密集を防ぐという措置を講じまして、それ以外に、館内にアルコールなども設置を継続しています。

こちらの展示ですけれども、チラシのほうには記載がございますが、群馬県桐生市にご

ざいます大川美術館から作品の借用を受けまして、藤島武二のスケッチコレクションを展示するということを行っております。それとともに、中村研一の所蔵作品のコレクションの中からスケッチ作品を展示しておりまして、今回、前期の段階で展示数が１１１点ということで、２年ぶりの展示、企画展ですけれども、今までの展示数としましては突出した形で点数が多くなっております。

３０日から１１月４日、本日時点での入館者数ですが、資料のほうに示しておりますように、合計で１５８人御入館をいただいております。

この後１２月１２日まで会期がございますが、途中に展示替えを挟む予定で、藤島武二の作品が一部展示替えとなります。展示替えに関しましては、１１月１６日火曜日、休館日を予定しております。

開催中の展覧会に関しましては以上です。

【鉄矢会長】　　これで事業実施報告ということで、これは開催中のですね。

じゃ、２番目になるのかな。

【河上学芸員】　　それでは、２番目、今後開催予定の展覧会・教育普及事業に関しまして、１番の展覧会、３月から５月を予定しております所蔵作品展、担当は河上がさせていただく予定です。こちらに関しましては、展覧会名が「かげもまた光なり―中村研一の色」ということで、戦後の中村研一の作品に焦点を当てて、また、同時に色をテーマとした展覧会の企画を予定しております。

会期、閉館時間、休館日、観覧料等に関しましては、こちらにありますとおり、全て未定でございまして、今後のコロナの状況によっては以前の開館時間や開館日に戻す可能性もなきにしもあらずというところですけれども、まだこちらは決定がされておりません。

関連企画に関しましても、まだ具体的には決まっておりませんが、状況が許せば、ぜひワークショップ等々を行えればと考えております。

続きまして、２番、教育普及事業、鑑賞教室に関して、西尾さんのほうから。

【西尾学芸員】　　教育普及事業に関しましては、今月中旬から１２月上旬にかけて何件かまとまって鑑賞教室を予定しておりまして、新型コロナウイルスが今後も落ち着いているという状況でしたら、予定どおり開催する運びでおります。

なお、９月３日の第三小学校に関しましては、開催日未定となってしまっているんですけれども、こちらは誤りでして、延期はしないことになりました。その代わり、生徒数に応じた招待券をお渡しして、この秋の展覧会に各自学生さんに来ていただこうという案で

おりますが、まだこちらのほうも招待券のお渡しが済んでいない状態で、これからお送りするというところです。

鑑賞教室に関しては、以上です。

【河上学芸員】　学芸員実習ですね。

【西尾学芸員】　それから、先月頃に美術館に依頼がありまして、こちら、③の学芸員実習とあるんですけれども、一般の方から１名、学芸員実習をはけの森美術館で体験したいという御意見がありました。先方が通信教育で通っていらっしゃる大学とのすり合わせも済んでおりまして、実習生を受け入れるという形になりました。なので、１１月から来年の２月頃にかけて、６日程度実習生を受け入れるという措置を取ることとなりました。

こちらで以上です。

【鉄矢会長】　ここまでで、何か一度質問等ありますでしょうか。御意見でも。

鉄矢です。藤島武二のトレーシングペーパーに書いてあるのって、子供にやらせたいなと思って、図工の先生に入れ知恵して、ここでやらなくていいんだけれども、こういうふうにやったんだよというのを見せてあげると、図工でやってみると、これが藤島武二のトレーニング方法だったよとか、何か言ってあげると、絵って写しちゃいけないとかまねちゃいけないというのがどうしても図工の中には多いんですけれども、そうやっても楽しめるんだよということがあれば、やり方を教えるというのもありかなという意見です。

【中村学芸員】　ありがとうございます。藤島武二のスケッチ作品、模写に関しては非常に小型の作品で、正直どういうふうに、特に年齢の若い人たちにアプローチしていこうかと考えていたところでしたので、アドバイスありがとうございます。

【原田委員】　質問よろしいですか。関連して、いろんな多彩なスケッチがあって面白かったんですが、その中で、今お話の出たトレーシングペーパーで写すというのが、これもスケッチというのかとびっくりしたんですけれども、一般的にスケッチの中に入るんですか、それとも今回あえて入れたということなんでしょうか。

【中村学芸員】　そうですね。まずスケッチという言葉を厳格に定義するのか、それともやや広い範囲で定義するのかというところはあるんですけれども、今回は意図的にスケッチという言葉をかなり広い形で、いろんなものを含むという取り方をしております。ある意味で模写みたいなものは、今回、意図的にスケッチの中に入れ込んでいると言えなくもないと思います。厳密に言えばスケッチというのは、見たものをそのまま紙に写し取っていくとか、そういうもののことをいいますから、模写というのは厳密なスケッチという

のからは外れてしまうんですけれども、ただ、今回、リーフレットのほうにも書いたんですが、スケッチという言葉の広さ、曖昧さというものを逆にスケッチの面白さという形で取りたいと思っていますので、そういった意味では、今回、意図的に模写というのもスケッチに含んでみました。

【原田委員】　ありがとうございました。

【鉄矢会長】　写真を写しているのは模写って言わないんですよね。

【中村学芸員】　そうですね。模写とは言わないです。

【鉄矢会長】　なので、あれはスケッチになる。難しいなという。これは写真だろうなと思いました。

【中村学芸員】　模写というよりは、日本画の敷き写しに近いと思います。

【鉄矢会長】　ああ、敷き写し。

【山村委員】　細かい質問ですけれども、いいですか。

【鉄矢会長】　はい。

【山村委員】　紙がトレーシングペーパーには見えなかったんですけれども、どんな紙なんですか。

【中村学芸員】　スケッチ作品は既に額装された状態で私も借用してきて、中身を完全に剝がした状態では確認できていないんですけれども、ただ、トレーシングペーパーの状態であったものに関しては、ちょっとこれは保存上の問題がありまして、多分もう２０年ぐらい前だと思うんですけれども、大川美術館の大川さんの手元に入った段階で、既に裏打ちがされているということです。

【山村委員】　ああ、なるほど。

【中村学芸員】　経緯がちょっとはっきりしないんだけれども、裏打ちをしたときに、裏打ちの紙のほうに印を押しているということなので、必ずしも今の状態で、トレーシングペーパーだけで額装されているわけではないようです。

【山村委員】　分かりました。

【中村学芸員】　物によっては相当デリケートな状態になっているということなので、大川美術館のほうでもここしばらく全ての作品を額装の状態から動かしていないそうなので、ちょっとトレーシングペーパーの状況と、本当に全部トレーシングペーパーなのかというところの確証は少し曖昧な範囲があります。

【山村委員】　当時の、まだ明治末期とか、もう１００年も前ですから、トレーシング

ペーパーと我々が一般に呼んでいるものとは違うんだろうなと思うんですが、どういう紙だったのかちょっと興味があったので、聞いてみました。

それから、もう一つですけれども、さっき鉄矢委員も言われたとおり、みんな小さいですよね。それで、例えば雑誌の挿絵とか、印刷図版とか、銅版画とか、あるいはオフセットとか、そういったものから写し取っていると思うんですが、原版というか、実際撮った本とか、そういう印刷物とか、あるいは版画とかは残っているんですか。

【中村学芸員】　はい、原図の作者が判明しているものもありますので、そうしたものについてはカッコ書きで示しています。ただ特に最初のほうに飾ってあったような振り袖姿の女性像ですとか、あの辺りははっきり分かっていないようです。先ほど先生からも御指摘があったように、紙として、今でいうところのトレーシングペーパーなのか、そうでないのかということも含めてはっきりしないところもあります。ただ、借用のときにチェックした様子では、かなり部分的に酸化が進んでいる紙もありましたので、どうも何かしら塗られているということと、それから薄墨で印影がつけてあるものとそうでないものがありますので、インクの吸い込みにやや差があるようなんです。そういったところでいうと、もしかすると模写と呼んでいるもの全てが同一の紙ではない可能性もあります。模写というふうになっているもの以外にも、枠がつけてあるものとそうでないものがありますので、枠が引いてあるものに関しては、刊行物とかからの図版の敷き写しである可能性が高いのではないかなと思うんですが、それ以外の枠のついていないものについてははっきりしていない部分が大きいです。

【山村委員】　分かりました。

【鉄矢会長】　そうですね。トレーシングペーパーって言っていないかもしれません。美濃紙とか。

【山村委員】　そうですね。西洋紙なのか和紙なのかも分からないですね。

【鉄矢会長】　そうですね。現代の建築で図面を描いて、トレーシングペーパーは駄目になるから美濃紙に描けと言われたときにみんなでぞっとしましたから。

ほかに御意見等ございますでしょうか。

では、その他のほうをお願いできますか。作品寄贈の申出。

【河上学芸員】　富永さんの寄贈の件に関して、中村さんからお願いできますでしょうか。

【中村学芸員】　分かりました。では、３のその他のほう、最初の作品寄贈について、

中村から報告させていただきます。

現在、こちらのレジュメの資料の３のところに示してありますように、作品寄贈の申出というのが２点ございまして、前者、富永親徳作品について、まず説明をさせていただきます。

こちらは小金井市内に富永親徳という洋画家のアトリエがありまして、そのアトリエ内に作品が数十点程度保存されているということで、遺族から寄贈についての打診がございました。実際にアトリエに９月に学芸員３名でお伺いしまして、中を確認したんですけれども、相当な点数の作品がございます。大型の作品は壁にかかっているんですけれども、それ以外に床に積み上げられた状態になっている作品ですとか、箱に詰め込まれた作品ですとか、寄贈を受けるとしても、どれを受けるのかということに関しての選別をする以前の問題として、まずアトリエにどのぐらい作品があるのかということを確認してからでないと判断ができないということで、現在いろいろ調整を進めているところです。

この富永親徳という作家に関しましては、東京美術学校に入学したのが１９２０年頃で、第２回と第３回の帝展に作品を出品していた洋画家であるということは確認されております。それ以外のことを示す外部資料が非常に少ない画家で、現在いろいろな資料を集めているところなんですけれども、台湾でどうも石川欽一郎に会って画家を目指したというところまでは分かっているんですが、現在、そもそもこの人がどういう人なのかという基礎的な調査が重要になってくるであろうと。寄贈をお受けするかどうかということに関しては、判断が数段階先になるのではないかと思われます。

作品寄贈の１件目、富永親徳作品に関しては以上です。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。いかがでしょうか、今の。御意見ございますか。

【山村委員】　全くそのとおりだと思います。作品の寄贈については慎重になったほうがいいんです。特にこういう場合、作家についてもまだはっきりと分からない、作品の点数とか規模、選定についても非常に困難な状況で、しかも御遺族のほうはすごく期待していらっしゃるという中で寄贈を受けるのは大変リスクも伴うし、ゆっくり検討させてくださいというふうに距離を取りながらお付き合いするのがいいと思います。すぐできる、できないとか、あるいは本格的に調査してしまうと、もう抜けられなくなりますから、そこは上手にやったほうがいいです。

【鉄矢会長】　根本的に３人の学芸員さんが見て気に入った絵だったんですか。迫力があっていい絵だと思った感じはあったんですか。

【河上学芸員】　　あります。

【鉄矢会長】　　そういうことがあるんですね。

【河上学芸員】　　個人的な。

【中村学芸員】　　ここに関しては、実は東京美術学校に入学する前の作品というものが、割に面白いです。植民地時代の台湾で描かれたものでして、１９１０年ぐらいまでの台湾の様子がよく分かるものとしては、資料的な価値も期待できる感じがあります。ただ、さっき御指摘がありましたように、相当程度のもの全てを寄贈で受け入れることは明らかに現実的ではないというところがありますので、遺族の方々が全てを受け入れてほしいという希望を出されるのであれば、ちょっとこれは受入れができない状態なんです。正直なところ、戦後の作品に関しては、極めてオーソドックスな婦人像であるとか静物画といったものになってしまいますので、資料的な価値云々何か言えることを見つけていけるかというと、少し厳しいものがあると率直に言って思います。そういった意味では、選別を行わなければ受け入れることができない。遺族のほうではアトリエをすぐに空けたいというわけではないようですので、差し迫った時間的な期限があるわけではないので、腰を据えて選別していく必要があると思っています。

【鉄矢会長】　　この方は台湾の方なんですか。

【西尾学芸員】　　違います。

【鉄矢会長】　　違うんだ。

【西尾学芸員】　　日本出身。日本で生まれた方で。

【鉄矢会長】　　で、台湾に行っていたんですか。

【河上学芸員】　　先生として、台湾で。

【鉄矢会長】　　ああ、先生として台湾に。

【西尾学芸員】　　最初、多分学生の頃に台湾に渡っていて。

【河上学芸員】　　学生で、そうだ。

【西尾学芸員】　　その後、現地で恐らく教職に就いていた可能性が。

【山村委員】　　それは大学ですか。

【西尾学芸員】　　いや……、中等教育学校……、中等教育？

【河上学芸員】　　そうですね。

【中村学芸員】　　師範学校です。

【西尾学芸員】　　師範学校、そうだ。

【河上学芸員】　　で、戻ってきてからですよね。

【中村学芸員】　　総督府の師範学校で教師をしていたようです。残されている写真類なんかから判断するに、総督府の師範学校だけじゃなくて、女学校の先生もしていた可能性があります。

【山村委員】　　東京美術学校を出てから台湾に渡って、師範学校の先生になったの？

【西尾学芸員】　　違います。

【河上学芸員】　　逆です。遅いんですよね。

【中村学芸員】　　逆なんです。台湾で先生をしているときに石川欽一郎に会って、そこで画家になろうということで日本に戻ってきて、東京美術学校に入っています。

【山村委員】　　なるほど。

【原田委員】　　で、面白くない絵を描くようになっちゃった。

【河上学芸員】　　そうではないです。

【鉄矢会長】　　そうではありませんか。

【西尾学芸員】　　そうではないです。とにかくとても大きいんです。どれも大型の作品で、壁の上のほうに全部かかっているんですけれども、それも取るのに大分大変な作業になるので。

【山村委員】　　もともと収集方針は中村研一にゆかりのある作家の作品と、小金井市にゆかりのある作品ですね。

【事務局】　　多摩全域ですかね。

【山村委員】　　ああ、多摩全域。

【山村委員】　　実際のところは、多摩全域を相手にしても、全部というわけにはいかないんですよね。

【事務局】　　そうですね。

【山村委員】　　ごめんなさい。何かありましたっけ、その辺の方針って。

【事務局】　　収集方針はあります。あとは子供たちの鑑賞の参考になるようなものということがありますけれども。

【山村委員】　　中村研一か多摩にゆかりがあって、収集方針に書いてあるかどうか分からないけれども、実際のところは、その中でもどういうものに、焦点を絞って、ここは集めてきていますか？

【事務局】　　中村研一と同時代に生きた画家の作品を今まではコレクションしています。

【山村委員】　　すると、一応同時代に生きているから、そこには引っかかるので……。

【事務局】　　そこには引っかかるし、小金井市に在住していたので、その辺は引っかかるんですけれども……。

【中村学芸員】　　そうですね。東京美術学校に入った世代としては中村研一の１つ上の世代ぐらいに相当しますので、そういった意味では近代洋画の中で連続性を持って見られる可能性があります。

　あと、実は小金井のこの辺りは富永さんが複数住んでいまして、ちょっとどの富永なのかはっきりしないんですけれども、中村研一の日記を見ると「富永さん」という名前がちょこちょこ出てくるんです。なので、もしかすると戦後こちらに移住してきてから同じ市内に富永という画家の先輩がいることを認識していた可能性はあります。ただ、まだこの部分は日記などの資料を精査していく必要があると思います。

【事務局】　　寄贈者の方とお話をしたときに、このはけ沿いに富永さんはお住まいなんですけれども、その方と御親戚ですかとお聞きしたら、ちょっとそれは分からないとおっしゃっていたので、武蔵野婦人の舞台になった富永さんがいらっしゃるんですけれども、その方はあまり知らないわみたいなことをおっしゃっていましたけれども、お孫さんなので。

【山村委員】　　分からないですよね。

【事務局】　　分からないですね、その辺は。

【中村学芸員】　　日記を見ると、「富永さん」と「富永君」という２人の富永が出てくるんです。なので、「富永君」のほうが武蔵野夫人の富永さんだったら、「富永さん」と書いているほうは別の富永さんである可能性があります。

【山村委員】　　なるほどね。この富永親徳さんは「富永さん」のほうでしょうか。可能性として。

【中村学芸員】　　かもしれないですけれども、さらにまた別の富永さんの可能性もありますので、ここはできるだけ期待で見ないように冷静に判断していきたいと思います。

【山村委員】　　とにかくゆっくり調査してください。関連が何でも多いほうがいいし、作品の選び方にもそれが関係してくるので。

【鉄矢会長】　　１個年上で、年齢が結構上なんですよね。１個学年は上で、年齢は結構上の人です。

【中村学芸員】　　はい。

【鉄矢会長】　　それはさんづけだな。

【中村学芸員】　　既に東京美術学校に入った段階で２０代半ばだったということですので。

【山村委員】　　なるほど。面白いけれども、全部入れたら大変ですね。

【事務局】　　全部は受け入れられないですね。

【鉄矢会長】　　収蔵庫を寄贈してもらうというのは。

【山村委員】　　維持が大変です。

【鉄矢会長】　　そうか。

【山村委員】　　でも、確かに１９１０年代、２０年代の台湾の風景とか、あるいは台湾にいた人の作品というのはそんなにはないので貴重です。

【河上学芸員】　　それがすべて板絵で、サイズ的にはとても小さいものが何十点という形なので、収蔵庫のキャパシティーを考えたときにもちょうどいいなということを少し話はしているんですけれども。

【西尾学芸員】　　あと、１点ちょっと迷っているところではあるんですけれども、富永親徳さんは知名度が全くない作家さんだと思います。これは理由がありまして、富永さんは画家として作品を売ることをよしとしていなかったので、基本的に画壇で地位を築こうとか、そういった考え方が全くない方でした。

【河上学芸員】　　パトロンがいらっしゃった。

【西尾学芸員】　　パトロンがいらしたそうで、その方を経由して作品を売ることはあったそうなんですけれども、大々的に発表したりするのは、東京美術学校卒業後は恐らくほとんどなかった。

【山村委員】　　でも、帝展の第１回、第２回は出ているんだよね。

【西尾学芸員】　　そうなんです。なので、だからといって作品の質が低いというわけでは全くございませんので、美術史の中に包含されていないような作家であることゆえに余計にしっかりと研究をして、戦後の作品に関してもやはりちゃんと精査した上で、どうすべきか、うちでは所蔵できないけれども、ほかのところでどこか受け取ってくれないかですとか、そういうところも含めて考えておく必要はあるのではないかと思っています。

以上です。

【山村委員】　　分かりました。

【鉄矢会長】　　先ほど山村委員からあったように、深入りして抜けられないとならない

ようにしながらいい距離感というのが、多分いいアドバイスだと思います。正直言って受け入れられるぐらいに予算規模とか設備とかが十分潤沢であれば、みんないいじゃんというような感じの、面白そうじゃん、研究したらいいじゃないと言いたくなるところまではあるんですけれども、でも、予算もなく、施設も広くもなくというところですので、あとは御遺族のお気持ちを傷つけないように、すごくアクロバットなお願いですけれども、頑張ってください。

次、中村研一作品（横浜市）というのは。

【西尾学芸員】　西尾のほうから失礼いたします。こちらは先月寄贈の依頼がありました。中村研一の作品と思われる作品の写真を既にお送りいただいておりまして、こちらも学芸員３人で確認しまして、恐らくそうなのではないかと、今、写真を見た段階での現時点で判断はそういった形になっております。所蔵者の方が横浜市内にお住まいということで、こちらのほうに、今月末に河上と西尾でまずは実見調査に伺うという形になっております。

こちらの作品は、寄贈を受け入れるかという決定は、まだもちろん先になるのですけれども、ざっくりと、その作風からいって、これはもう年記があるんですけれども、１９２３年の作品でして、同じ頃に描かれた当館の所存作品ですと、「Ｋ氏肖像」といって、全体的に茶色がかった年配の男性の肖像画になっているんですけれども、こちらはどちらかというとそれとは対照的な、より白馬会系の影響が強い、海を背景にした機関士の方の肖像画になっておりまして、まだ実際に見てみないと何ともいえない部分も多いかとは思うんですけれども、実際に今月末に伺う予定でおります。

【山村委員】　油絵ですか。

【西尾学芸員】　失礼しました。油絵です。

【山村委員】　大きさはどれぐらいなんですか。

【西尾学芸員】　大きさは大体２０号程度です。

【山村委員】　ぜひ調査してください。貴重だと思うので。

横浜市にお住まいの方はどういう経緯で持っていらっしゃるんでしょうか。

【西尾学芸員】　こちらの肖像画に書かれた方のお孫さんということです。

【山村委員】　機関士の方のお孫さんですか。

【西尾学芸員】　お孫さんです。

【鉄矢会長】　では、事業報告等はこれでよろしいでしょうか。

なければ、３番目の意見交換をしたいと思いますけれども、加藤委員、いかがでしょうか。御意見ございますか。いきなり振っちゃいましたけれども、せっかく来ているので、ぜひ御発言を。

【加藤指導室長】　　そうですね。私は学校のほうなので、学校はコロナウイルスが大分落ち着いてきましたので、１１月中旬からまた訪問のほうが再開されるのかなと思いますが、いいタイミングかなと思っています。

第三小学校は、もう中止ということですかね。

【河上学芸員】　　そうですね。はい。

【加藤指導室長】　　招待券がというお話がありましたけれども、保護者の方の分とかはないんですよね。

【西尾学芸員】　　いえ、保護者の方の分も含めて、１つの家庭に２枚ずつ配布した方がと良いと思っています。

【加藤指導室長】　　ちょっとすべての家庭に配布するのはなかなか難しいかなというのは思ったりしました。

【鉄矢会長】　　それはどういう表現がいいんでしょうね。中止というよりも、何か代替案ですよね。だから中止はしていなくて、コロナの対策として、ばらけていらっしゃいよという話に変えたということですよね。

【河上学芸員】　　そうですね。学芸員による紹介というものがない状態で、本当に個々に保護者の方と一緒に回って見ていただくという案を取らせていただく。

【鉄矢会長】　　ネーミングしたほうがいいですね。

【河上学芸員】　　ネーミングしたほうがいいですか。

【鉄矢会長】　　うん。

【山村委員】　　これは各小学校何人ずつぐらい来るの？

【河上学芸員】　　いつも１クラス３０人前後で、クラスは小さい規模の学校だと２組で、大きいと４組。なので午前中で終わる日と、お昼をまたいで午前、午後と丸一日かかる日とあるんですけれども。

【山村委員】　　一度に３０人？

【河上学芸員】　　一度に３０人。

【山村委員】　　じゃ、結構厳しいですね。

【河上学芸員】　　はい。なので、今回は可動壁がかなり出ている展示なので、前回、一

度南小学校を５月にやったときは全く壁を出さない所蔵作品展だったので、しかも緊急事態宣言下で来館者がゼロ、休館中に行ったので、かなり広々と自由に動いてもらって見ていただけたんですけれども、今回は壁も出ているし、一般のお客様も時間によっては入っているので、その辺りも先生たちと協力し合って開催ができればと思っています。

【鉄矢会長】　何かそれらしい人が来たときに、タイムサービスじゃないですけれども、ギャラリートークサービスが急に出てくるということはないんですよね。学芸員は忙しいんですもんね。ギャラリートークみたいなのを学校向けにいつもよりちょっと多めにつくってあげているよというサービスがあるといいな。

【河上学芸員】　一応ギャラリートークは少し多めにするか検討します。

【鉄矢会長】　多めに。

【河上学芸員】　そうですね。自由鑑賞の時間はやはりある程度取って、自由に見ていただいた後に、１つの作品に焦点を当てた内容でもいいかもしれません。

【鉄矢会長】　いやいや、この第三小学校です。

【河上学芸員】　あ、三小のですね。

【鉄矢会長】　三小の人たちがふわーっと来ている普通のときに、当たったんだよという子供がいても。

【河上学芸員】　ああ、そういうことですね。

【鉄矢会長】　そういう美術館ってこういうことが聞けるんだよという面白さがあってもいいのかなと。

【河上学芸員】　なるほど。今、現状がギャラリートークをやっていませんということで。

【鉄矢会長】　という話ですよね。

【河上学芸員】　もう掲示してしまっているところなので、ちょっと難しいかもしれないんですけれども。

【鉄矢会長】　背中に「学芸員です。質問は私に」とかやって歩くみたいな。

【河上学芸員】　質問がある方は、直接口頭では難しいですけれども、メールやファクスなどでお問い合わせくださいと御案内しています。

【鉄矢会長】　すいません。委員の名前がちょっと。河田委員、いかがでしょうか。

【河田館長】　私が拝命してから企画展というのが初めてということで、この藤島武二さんの作品をお借りした大川美術館の館長さんと、あと、東京に住んでいらっしゃるんで

すけれども、藤島武二さんのお孫さんに当たる方が開会式のときにちょうど見えてくださいまして、少しお話をさせていただきました。この美術館にある藤島の絵が１点ありまして、それについて、館長のお孫さんも見たことがない、初めて見たとおっしゃっていまして、それがどういう経過でこちらに来たのかというのが、ちょっとこちらでは不明ということだったんですけれども、そのときのお孫さんのお話だと、恐らく亡くなった後に分けた中の１つじゃないかということをおっしゃったような気がしていたんですけれども。

【河上学芸員】　　形見分けでということで。

【河田館長】　　そういう出会いで知らなかった情報とかを関係の方からお聞きしたりして、なかなか御縁を感じたところです。

　あと、藤島さんの絵は、私の個人的な感想としては、朱色がいろんな絵であるじゃないですか。朱色って、自分の中では朱肉だったりとか、あまりいいイメージがなかった色なんです。赤でもちょっときついような感じのイメージがあって、そういうイメージはなかったんですけれども、今年の秋になって、はやっているのか身の回りに朱色のものが幾つかあったりとかして、それで今回の作品展を見て、墨の黒と、朱色のちょっと薄めのレトロな感じの色の作品が、色合いがすごくいいなと思いました。

　このフライヤーにもあるんですけれども、「けしと蝶」でしたっけ。何かそういう作品が裏側のほうに出ていて、その作品が、すごく色使いとか雰囲気がすてきだなと思ってお気に入りになりました。

【鉄矢会長】　　お気に入りをまず見つけるって、すごく大事ですもんね。

【河田館長】　　スケッチということで全体的に優しい感じのものがすごく多くて、個人的にはすごくすてきな作品ばかりだなと思って拝見しております。

　以上です。

【鉄矢会長】　　私、コメントを。鉄矢からですけれども、踏み台サービス、子供さん用に。やっぱり小さい作品なので、あれは子供が見るにはちょっときついかなと思って、踏み台サービスありますとか。美術館のバリアフリーを考えたときに、やっぱり視点の高さを、最初は絵を下げるというのもあるのかなと思ったんですけれども、絵を下げるのは見ているのがつらい人が多くなるから、逆に本当に踏み台とか、何かちょっと上げるものがあると。

【事務局】　　この間、南小の先生が鑑賞教室の下見で来たときに、まさに同じことを、ちょっと高いかなということをおっしゃっていました。

【鉄矢会長】　　高橋雅子先生ですね。

【事務局】　　そうです。

【鉄矢会長】　　教え子でした。そう。同じことを言っているのか。

【事務局】　　ちょっと高いかな、でも大丈夫かなみたいな感じで言っていらしたけれども。

【鉄矢会長】　　同じことを言ったので、ちょっと恥ずかしいな。

【中村学芸員】　　高さは１５０センチ程度に設定されていますので、ちょっとお子さんには高めではあります。やっぱり作品のバランスと点数を考えて、１５０から下げると、ちょっと展示室内の構成としておかしいところがあったので、外見的な部分を優先して、その部分は子供に対しては見づらい位置に来ちゃっているものも正直あると思います。

【鉄矢会長】　　いや、本当にどういうのがいいのかなと思って。乗っかって落っこちてもらっても困るし、でも、身長が低くなったおばあさんなんかも見に来たりするときには、ほんのちょっとしたサービスがあるだけで。手すりつきの踏み台なんていうと、そんな豪華なものだったら邪魔でしようがないと思うし、なかなか難しいリクエストを僕はしたんですけれども、そのように思いました。

【山村委員】　　さっきの模写とか、いわゆるスケッチとか挿絵、それから下図とか、いろんな種類のものがありますよね。しかも油絵の模写だったり、銅版画の描き方だったり。だから面白かったんですけれども、どういう文脈のものなのかなというものについて、簡単な解説はあったんですけれども、もうちょっと整理されてあると分かりやすかったかなとは思いました。その辺は大川美術館のほうもこんな感じで展示されているんですか。

【中村学芸員】　　大川美術館では、どちらかというと解説はカタログのほうに特化するという形を取っていて、展示室の中ではほとんど解説をつけずに展示して、細かい内容はカタログの中を見てくださいというきっぱりとした分け方をしていたんです。

今回、そういう意味では大川の展示を意識している部分は多分にあるんですけれども、何もつけずに藤島を出してしまうというのは、当館ではちょっと思い切りがよ過ぎるかなと思いまして、少し解説をつける形に変更しています。

【山村委員】　　なるほど。

【鉄矢会長】　　先ほど中村さんがおっしゃっていたトレーシングペーパーの当て紙、裏打ちの紙に判こが押してあるとか、その判こは誰が押したのか気になったのと、マットの加工の仕方が気になって、あれ？　これ、丸く切り抜いているマットは誰のトリミングな

んだろうなと思ったり、あのところだけ穴が空いているから、すごくあの辺が、美術館の中の学芸員の方がこういうのが好きだったのかな、館長がこうやれと言ったのかななんて思いながら見ていましたけれども、皆さんコメントしなくていいです。これはコメント要らないです。何かとげになるので。

【原田委員】　　よろしいですか。

【鉄矢会長】　　はい。

【原田委員】　　美術展の入り口について、ちょっと気づいたので。普通展覧会ってドアを開けて入るということはないですよね。こちらは必ずドアを開けて入らなきゃいけない。例えば車椅子の方とか松葉づえの方というのは、ちょっと大変かなと思うんです。それから、今回はドアを開けて入ったら、うわっ、いつもよりも随分ボリュームがあるなという驚きがあって、開ける効果があったと思うんですけども、大体開いているほうがいいんじゃないかなと思うんです。例えば冒頭の大川美術館の説明や展覧会の内容などはドアの前のロビーのところにあって、ドアを開放してあって入れるというふうにできない事情が何かあるのかなと思って、気になったんですが。

【鉄矢会長】　　空調ですかね。

【事務局】　　できない事情があります。実は、本来ならば美術館は玄関の扉が二重になっていないといけないんですが、ここの美術館は二重になっていないんです。頂いた美術館なので、そこに不備があって、要するに玄関の扉が二重になっていないので、虫が全部入ってきちゃうんです。こういう環境なので、虫がいっぱい入ってきちゃいますので、平成２４年に改修したときに展示室前にエアカーテンをつけたんですけれども、やはり扉を開放しちゃうと虫が全部入ってきちゃうというところがありまして、本当に原田委員がおっしゃっていることはよく分かって、そのほうがいいんですけれども、うちの美術館のそういう事情がありまして、あそこは開けっ放しにはできないんです。

【原田委員】　　虫の事情とは。

【山村委員】　　虫だけじゃないんですよね。空調で、温度管理とか湿度管理をしっかりする必要がある。それで、特に紙なんていうのは古いものは弱い。普通外気だと湿度変化が激しいので、そうすると紙が縮んだり伸びたりしてダメージを与えるんです。ですから、空調的にはこれでも全然緩いぐらいです。

【事務局】　　すいません。

【山村委員】　　特にスケッチとかは心配だよね。

【原田委員】　　分かりました。

【山村委員】　　あそこの展示室の前にも本当はもう一個扉があったほうがいいんだよね。

【中村学芸員】　　そうですね。ワンクッションあって、そこで外気の流入をシャットダウンするという形が取れれば望ましいんですけれども、当館の場合、すぐそばに中庭の出入口もありますので。そういった意味でも１階展示室の前のスペースは閉め切っておかないと、虫の侵入ということに関しては少し危険性が高いんです。

【鉄矢会長】　　東京が「東京 OSEKKAI 化計画」みたいなのを始めましたよね。パラリンピック以降、おせっかいを推奨しましょうみたいな、声をこっちがかけてあげるという。

【事務局】　　あれですよね、人に対して。

【鉄矢会長】　　そうです。だから車椅子の方に対して、美術館の人間じゃなくて、同じ市民がちょっと声をかけて、ちょっと手伝って、困っていますかとかできるようになっていけばバリアフリーになると思います。

ありがとうございました。そのほか御意見等ございますでしょうか。

では、なければ、最後、４番目、次回運営協議会の日程です。

【事務局】　　１月か２月の開催とさせていただきたいと思います。

【鉄矢会長】　　では、１月２５日でいかかでしょうか。

【山村委員】　　２５日で大丈夫です。

【鉄矢会長】　　それでは、１月２５日、１８時半からということでよろしくお願いします。以上をもちまして、小金井市立はけの森美術館運営協議会を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

―― 了 ――